テスキユー、ルソー等あり、十八世紀末のユストウス・メーザー以後今日に至るドイツのゲルマーニの研究家に至つては枚擧に遑がない。十九世紀のドイツ史學の大半といへずともその重要な一半がゲルマーニ研究に費されたことは否定されない。原始ゲルマーニ研究は今日に於いては最早單に文獻的研究のみでは充分でなく、言語語、考古學、地誌學等の多數の發達した特殊部門の研究の結果を綜合して始めて適正なる把握に至り得るのである。けれどもタキトウスのゲルマーニアが原始ゲルマーニ研究上に占める位置は今日に於いても決して低下してゐない。本書なくては原始ゲルマーニに就いてわれ〳〵は今日言ひ得る半分のことも言ひ得ないであらう。まことに原始ゲルマーニ研究家にとつて本書は知識の源泉である。

全篇四十六章、ゲルマーニ諸部族と、彼等の政治・經濟・宗教その他日常生活上の慣習を簡潔な行文で描寫する。われ〳〵が原始ゲルマーニに就いて知り度いと思ふことが餘すところなくこの小著に纏め上げられてゐる。かのカエサルのガルリア戰記も若干ゲルマーニに就いて物語る。けれどもこゝでは多數の夾雜物の中からゲルマーニがところどころ、極めて僅かづゝその面貌を露してゐるに過ぎない。ゲルマーニ研究者はその夾雜物の中からゲルマーニを見つけ出す勞苦に堪へないであらう。タキトウスの書はどの頁を繙いてもゲルマーニの生活を彫塑する。ゲルマーニ研究の文獻としてガルリア戰記は到底その比でない。

このゲルマーニアがわれ〳〵の最も信頼し得る譯者によつて邦譯を得たることは洵に喜ばしいことである。殊に、譯者にとつて必ずしも專門領域に屬しない附註の勞をとられたことは、ゲルマーニア研究の專門家をも喜ばすであらう。唯一つ氣付いた點を言へば、第二十六章にある「田野は先づ耕作するもゝ數に應じて、全體としての鄕によつて（鄕全體の共有財産として）占有せられ……云々」は原始ゲルマーニアの土地所有關係研究の無二の史料となる所、その解釋なり學說なりは甲論乙駁、種々分れてゐるのであるが、今はドプシユ說の樹立以來は、譯者の解釋とは反對にむしろ土地私有關係を示す典據とされてゐるのである。「鄕が全體」としてでなく「鄕人全體が」即ち鄕のうち土地を所有しない者はなく總てが土地を所得する、といふ意味に解されるのである。勿論譯者の說も一つの學說として有力に主張されたことはあつたけれども、今日では畧々それは克服されてゐると考へられる。再び改訂される機會には一考されんことを希望したい。

本譯書はさきに昭和七年に出版されたもの、今回あらためて譯文に手を加へ附註を訂增して再版されたものである。新刊と言ひ得ないのであるけれども、わが國に於けるゲルマーニア研究に貢獻する所大なるを思ひ敢へて江湖に推薦する所以である。（刀江書院、定價一圓五十錢）（井上）

アラビア思想史

——回教神學と回教哲學——

井筒俊彦著

回教文化に關する研究が、年と共に益々多きを加へるのは誠に慶すべきである。しかも、世界の歴史はアリアン人種の手に據つて、營まれて居ると云ふ考へが、未だ充分拔けきらない。

そのために、回教文化に對して、縱令、これが說かれても、所謂ヨーロッパ的見解の下に取扱はれる場合が、尙、尠くない。

アラビア思想史が新進の學徒たる著者によつて上梓されたことは、回教文化を正しく理解せしめる點に於て、實に意義深いものがある。

副題にも示されて居る通り、回教の神學と哲學との二部門に分つて記述され、西曆十二世紀を以て孰れも筆を止めて居る。而して、最初、アラビヤ人の觀照に就いて、視覺的、聽覺的なる特質を擧げ、個物を絕對的に尊ぶ彼等には、合成語が本質的に採入れ難いものであつた。卽ち、アラビア語の語彙の豐富なる所以を說き、轉じて、「微」を求むるはセム人種の特長なりとし、教祖ムハンマドこそこれが擅化であると斷じ、從つて、經典を見る場合、この態度を以てせねば甚だ、厭いものたるを指示して居る。

これは確に、著者の準備の良さを物語つて居るのであるが、アラビア語の造詣深い著者にして、その經典の有する視覺的、聽覺的な持味を高唱出來る筈であらう。

著者が自序に於て原語挿入の意義を說き、「監修者のことば」で大久保幸次氏が、これに觸れて居るのも、誠に故あるかなと謂はれやう。

第一部回教神學は、進んで回教法學の基本概念に入つて、回教正統派の四大學派を說き、序いで、思辯的神學の發生の經過に及んで居る。

ムグタズイラ派の出現までに、ウマイア朝の非宗教的と一般に云はれる點に觸れ、この家の敵對者の眼を以つて見るの要なきを誠めて居る。

合理主義的精神に貫かれたムグタズイラ派に對するアル・アシュアリーの思想を說いては、宗教改革と見て居り、しかも、「中間を行つた」と評された經緯を明にして居る。

斯くして、イマーム・ル・ハラマインの體系が整然と組織されたるが、アル・ガザリー出でゝ神への愛に基づく社會愛を敎へるに至つて居る。

第二部、回教哲學に入つて、先づ希臘哲學の譯譯、否、「哲學」の名稱さへ希臘語を音譯せるを示し、官廷出入のシリア人をこれに從はしめたこと、やがて、アル・キンディー出でゝ、後の發展に決定的方向を與へ、知性の四分法を示して居る。

次に、眞理を愛し、知識は實踐よりも優れて居るとしたアル・ファーラービーが、その思想はアリストテレス學者として、他は回教の問題を希臘哲學式に取扱はむとした點を說き、更にイブヌ・マスカワイヒの社會的倫理說に觸れて、友愛とは自己愛の限定でなければならぬとして居る。

斯くして、遂に、Avicenna として歐人に知られるイブヌ・スイーナーの哲學體系に入り、彼が學を思辯的と實踐的とに分ち、更に前者を自然學、數學、形而上學、倫理學、後者を個人道德學、

家庭道德學、公民道德學、政治學に分ちたるより、その尨大なる體系に解剖のメスを振ひ、紙頁の不足を著者は託ちつゝも、その闡明に努力をなして居る。

アル・ガザー、イブヌ・バーツヂア、イブヌ・トフアイルに夫々觸れた後、Averroes と歌人に傳へられたイブヌ・ルシドの思想を取扱ひ、遂に彼によつて成し遂げられた「哲學と宗教の一致」を檢討し、Dante が神曲に於て Averrois, che l'gran comento fes と稱へた、彼の有名な三段說を明かにして居る。

以上、讀後感の程度に過ぎないが、著者が、この荊棘の道を進むだ事に先づ敬意を拂ひたい。神學と哲學との二部門に分け、十二世紀を以つて止めた點については別に記述がない。孰れ著者としては考へのあること、信ずるが、今少し後世まで續けて欲しいとの望蜀の念もあるのは、餘り勝手な考へであらうか。

回教を觀る。しかも正しく觀る意味に於て、推奬すべき書の加へられたことを慶ぶものである。（昭和十六年七月、博文館、三圓、興亞全書一一）〔岡島誠太郎〕

蘭領印度

別技篤彥著

（小牧實繁教授鑑修　世界地理政治大系第四卷）

激しい時代轉換の嵐の中に今やあらゆるものが新しく誕生し、創造せられんとしつゝある。吾々は聲を大にして地理學もまた在來の堅い舊殼を脫し、新しき、眞に日本的なる地理學が建設せられつゝあると叫ぶことができる。嚮に高く揚げられた小牧教授の「日本地政學宣言」の旗幟に依つて吾々は吾が教室より新しき地理學が生育せられる無上の榮光を有するものであるが更に次の段階として必然的に新なる理念に基く具體的な世界各地域の研究が待たれるに至つた。そして此處に待望久しかりし別技篤彥氏の蘭領印度の刊行に接するを得た。最近南方問題の喧しく論ぜられるにつれ蘭印關係書籍の氾濫は全く一驚に價するものがある。而して本書の出現は凡ゆる意味に於いて在來の群書の止めを刺すものである。吾々は本書の出現を日本の爲に祝し、また眞に正しき蘭印全貌の本然の姿を明示した點に於いて蘭印自身の爲にも祝さねばならない。人は本書のうちに在來の地理書にみられるが如き單なる地理的事實の羅列と平板なる政治經濟事情の記載等の一切を揚棄して斯くも見事に美しく精妙に述べられた複雜な蘭印地政學の特性を一貌のうちに把握し巧妙に論述せられたる著者の非凡の才を感嘆せずにはをられないであらう。此の地域は著者年來の研究對象とし來つたところであつて、單なる飜譯、紹介等の從來の蘭印關係の書物とは根本的に相異する所以も又正に當然のことである。從つてこれは南溟の天地に寄せる大和民族の鄕愁であると共に八紘一宇の精神に基く新秩序と人類愛への叫びでもあると說く著者の情熱は其の精緻なる研鑽努力と相俟つて讀む者の胸に深き理解と熱き感動の情を呼び起さずにはおかないのである。

第一編序論――蘭印地政學の特性の概觀、蘭印を中心とする無數の島嶼を散布する亞濠地中海――其れは地球上の他の二大地中